第5巻

神木——ある炭鉱のできごと

リュウチンバン 劉慶邦 Liu Qingbang

命がけの炭坑労働者たち

『神木（しんぼく）』は中国の格差社会を背景に、出稼ぎ労働者をだまして命をねらう炭坑夫の文字通り命がけの厳しい生活を描く。「神木」とは「石炭」のこと。『盲井』のタイトルで映画化され（監督、脚本ともに李楊）、二〇〇三年ベルリン映画祭銀熊賞を受賞して話題を呼んだ。ほかに中篇一作と短篇六作を収録。

※本紙には、そのうちから短篇「幻影のランタン」を収めた。

【著者紹介】 一九五一年、河南省の生まれ。中学卒業後、農民や炭坑夫を経験。七八年、北京に出て「中国煤炭報」社で編集の仕事をするかたわら創作を始める。農村や炭坑を舞台にした細やかな描写に特徴がある。二〇〇一年、短篇『鞋』が第二回魯迅文学賞を短篇部門で受賞。長篇、中篇も書くが、短篇を得意とし「短篇王」とも呼ばれる。

【収録作品】 「ナイフを探せ！」「捨て難きもの——太平車」「幻影のランタン」「羊を飼う娘」「葬送のメロディー」「あの子はどこの子」「街へ出る」「神木——ある炭鉱のできごと」

【訳者】 立松昇一（拓殖大学教授）、渡辺新一（中央大学教授）

Take Free !

勉誠出版 Tel03-5215-9021 Fax03-5215-9025
WEBSITE. http://bensei.jp

「コレクション中国同時代小説」第一期（第1巻～第5巻）
2012年4月下旬刊行！
※第二期（第6巻～第10巻）は6月刊行予定

※実際の書籍とはレイアウトが異なります。

幻影のランタン

春節〈旧正月〉には爆竹、元宵節〈小正月〉にはランタンといったように、二つの節句のすごし方にはそれぞれに独特の趣きがある。爆竹は早朝に、天地を轟（とどろ）かすように鳴り響き、ランタンは夜に、村全体をあかあかと染める。

この村に住む人たちは先祖代々、毎年変わることなく、正月の五日が過ぎると、正月十五日のランタン飾りにとりかかる。村の人たちは正月の五日を「初五（チューウー）」と言わずに「破五（ポーウー）」と言う。「破五」の数日前は、これをやってはいけない、あれを動かしてはいけないという取り決めがある。これは一年間苦労して働いた人々にゆっくり休んでもらうために禁忌としたのものだ。「破五」が過ぎると、禁忌は解かれ、普段にもどる。

もっとも大切なことは子供のためにランタンを作ってやったり、買ってやったりすることだ。ランタンはコーリャンの茎で方形の骨組みを作るか、竹ひごで丸い外枠を作る。外側に薄くて赤いグラシン紙を貼り、まず上の傘の部分を作る。そのあとに作る台の部分は普通は桐の木片を使う。木片の中央にろうそく立て用の小さな釘を固定し、両側に傘の中で自由に動かせる細長い針金を通せば、ランタンが完成する。元宵節の夜になると、それぞれの家の子供たちは細長い柄でランタンを提げて家を出る。そうすると、星のように村のあちこちでランタンが揺れる。ゆらゆら揺れているうちに一同が集まり、誰のランタンが一番立派で、大きくて、きれいなのかを競うランタン比べが始まる。市に行ってランタンを買えば手間が省けるが、種類の多さに、どのランタンを買えばいいか戸惑ってしまう。元宵節が間近に迫った数日間は、あちこちの通りがさまざまなランタンで埋めつくされ、ランタンは文字どおり市の目玉商品となる。

sample

ランタンの種類となると、あげれば切りがない。方形のものには四角や六角、それに八角形があり、八角形のランタンは一つだけで存在感がある。丸い形には物を形どったものが多く、スイカランタン、カボチャランタン、手まりランタン、鯉ランタン、スッポンランタンなどさまざまなランタンがある。牛のふぐりランタンという壮観なものもある。これは露地では売らないし、コーリャン茎で作ったすだれを台にした露店でも売らない。サンザシの串刺し飴のように、一つ一つつなげて、竿に掛けて高くして売る。このランタンを売る者は、それだけではなく、一房一房垂れ下がった真っ赤な「牛のふぐり」を高く持ち上げて、市の間を売り歩く者もいる。彼らは大きな声で「牛のふぐり、さあ、買った、買った、牛のふぐりは落としても割れないよ」と言いながら売り歩く。このランタンはわりと丈夫で、幼い子供が持つのにはちょうどよい。子供が地面に落としても、高く跳ね上がって、形が崩れないのだ。

それから、部屋に飾る宮灯〈宮廷式飾りランタン〉や走馬灯を売る人もいる。宮灯は細かな彫刻が施された黒檀材を使い、四隅に龍や鳳凰の姿の飾りをつけ、角には黄金色の房飾りをかける。周りの四面には吉祥図が描かれた透明なガラスがはめ込まれ、とても豪華だ。

走馬灯には火が灯された。いよいよ走馬灯の実演だ。ゆらゆら回るろうそくの明かりが気流を起こして、上の羽根車を動かし、羽根車が馬のシルエットといっしょに動く。薄紙を貼ったランタンの外側から見ると、影絵芝居のように駿馬が跳びはね、さっと一頭が通り過ぎると、またさっと一頭が通りかかる。大きなランタンは芝居見物のように市に参集する人たちの注目を集める。人々は宮灯のすばらしさを賞賛し、走馬灯の美しさにつぎつぎに喝采の声をあげる。ランタン売りはランタンの近くに立っているが、必ずしも売ることだけが目的ではなく、一番の目的はランタンを誇ることだ。人々が自分たちの商品をこのように鑑賞するのを目にして、ランタン売りはとても誇らしく感じ、顔をランタンのように紅潮させる。

このようにして、元宵節がまだ来ないうちに、さまざまなランタンがつぎつぎと市に集まり、ランタン祭りの準備が始まる。数多くのランタンがゆらゆらときらめいて市に姿を見せ、間近に迫った元宵節の雰囲気をいやがうえにも

Sample

高めていく。人々は市から家路につき、ランタンの情報や祭りの雰囲気を多くの家々に伝え、ランタン祭りをぬかりなく行わなければいけないような気持にさせている。

国庄（クオチュアン）も市に行ったが、ホウレンソウとニンジンを少し買っただけで、娘の小連（シャオリェン）にランタンを買わなかった。正月を過ぎると、今年で彼女はやっと十三歳だ。まだランタンを提げる年齢なので、本来ならば娘にランタンを一つ買ってやらねばならない。この村の男の子や女の子は誰でも毎年ランタンを提げることで成長していく。まるでランタンを提げなければ、暗くて進む道が見えず、一歩一歩成長できないかのようだ。しかし、国庄は決めかねていた。今年は一体娘にランタンを買ってやったほうがいいものかどうかを。

小連は小学五年のときに、目に異常が起きた。国庄は娘を見てもらいにあちこちつれて行った。この目薬、あの目薬とどんな目薬を差しても娘の目はよくならなかった。娘の目ははじめのうちはぼんやりとわずかに見えていたが、最後にはまったく何も見えなくなってしまい、光りを失った。娘の大きな目は見た目には何も異常はなく、長い睫毛をまばたかせ、黒い部分は黒く、白い部分は白いが、光を感じる機能はなくなってしまったのだ。娘はもともと六年生にあがるはずだったが、目が見えなくなると、勉強がつづけられなくなって、毎日家にいるしかなかった。目がこうなった以上、ランタンは彼女にとってもう意味がなくなってしまった。ランタンは目の正常な人に用意されているもので、明かりの見えない人にはほとんど意味がない。しかし、国庄は娘にランタンを買ってやらないとは言えなかった。この村の子供たちは一旦大きくなれば、ランタンはもう提げないと自分から宣言する。そうしてはじめて両親は子供にランタンを買い与えることをやめる。ランタンを提げるか提げないかが子供と大人の境目で、ランタンを提げることをやめれば、大人の仲間入りをしたことになる。娘はランタンは要らないと言っていないので、やはり娘のために一つ購入してやったほうがよい。

去年の元宵節に国庄は娘のためにランタンを買ってやった。それは淡い青色のグラシン紙を貼った四面のそれぞれにカササギと紅梅と、ランとザクロが描かれているランタンだ。四本のコーリャン茎の支柱の上の端に、それぞれ赤

sample

や緑の紙を細く切って作った房がついていた。その房の花弁は菊の花弁よりも細く、風がなくても、かすかに動いた。父親がランタンを娘に渡すと、娘は大喜びで、ランタンの周りを回って眺め、いつまでも見飽きないでいた。夜になると、娘は村の通りで行われるほかの子供とのランタン比べに参加しなかったが、いつものように細長い柄でランタンを提げ、その柄を戸口の片側のレンガ塀の隙間に挿しておいた。しばらくしてランタンの中を覗いて見ると、ろうそくが燃え尽きようとしていたので、娘は部屋の中に持ち帰って吹き消した。去年の元宵節にはもちろん娘の目に異常はなかった。ランタンにたとえれば、その時の娘の目はやはり明かりを灯しつづけている小さなランタンだった。今年の娘の「小さなランタン」からは明かりが消えた。永遠に明かりは戻ってこない。

去年と同じであればやはり娘にランタンを一つ買って帰ることになるが、国庄にも心配していることがあった。娘がランタンに触っただけで自分の失明していることを思い出すのではないか、ランタンを提げている昔の光景を思い出して心を痛め、涙を流すのではないかと案じた。娘の目は物を見るということでは働かなくなったけれど、昔に比べて涙を盛んに流すようになった。何かを思い出すと、うなだれて涙をぽろぽろと流す。国庄は娘が涙を流すととても辛い思いがした。娘の涙を見ると、心が痛んでしばらく気が滅入ってしまう。

国庄はこのような板ばさみの気持ちをかかえて、市から家に戻り、娘と顔をあわせることになった。

ちょうど昼どきで、オンドリが時を告げ、メンドリが卵を産もうとしていた。娘の小連は台所のまな板を前にして麺を打っていた。生地を丸くし、さらに薄くして、小連はゆっくりと麺を打ちつづけていた。まな板の端においてある黒い小型のラジオから女の人の話す声が聞こえていた。父親が中庭に入ってくる足音を耳にして、小連はラジオのスイッチを切り、麺打ちの手を休めて、「とうさん、お帰りなさい」と言った。

いま帰ったよ、ホウレンソウとニンジンを少し買ってきたと言って、国庄は台所にやってきた。

父親が台所に入ってきたのを耳にして、小連は下を向いてしまった。失明してから小連は自分の目を人に見られないようにした。自分の父親にまで見せまいとするのだ。彼女は人が自分の目を見るのではないかと思って、訪ねてき

sample

た人が話そうとすると、すぐに下を向いてしまう。頭を下げたまま青白い下あごが胸にくっつくほどだ。彼女とどんなに長い時間話していても、頭をずっと下に向けたままだった。

「市はにぎやかだった？」

「にぎやかだったよ」

「いろんなものを売ってた？」

「ああ、売ってたよ」

国庄は市のさまざまなランタンについてはあえて触れようとはしなかった。ランタンの話題をなんとなく避けているようだった。

思いもかけず、小連が自分のほうからランタンのことを口にした。

「とうさん、あたしは今年のランタン祭りには参加しない、もう大きくなったもの」

国庄はすぐには返事をしなかった。十三歳の子供は「大きくなった」と言えるだろうか。この子は本当によくできた子だ。国庄は突然激しく鼻につんとくるものがあった。話をすると、のどのあたりが震えて、声がおかしいと娘に悟られるのではないかと案じた。

「とうさん、どうして話をしないの、どうしたの」

国庄はすこし咳をして自分の気持ちを整えてから言った。

「べつにどうもしてない、おまえは正月がきてもまだ十三にならない、まだ子供だよ……自分では大きくなったと言っているが、とうさんにはお前の気持ちが痛いほどわかる……」

小連はやはり父親の声が普通ではないように感じて、これ以上父親に話をつづけさせまいとした。

「とうさん、あたしは今年もランタン菓子をたくさんつくりたいわ」

「作りたいだけ、作ればいいよ」

sample

元宵節にランタン形の菓子を作ることは、中原地方の人々が先祖から受け継いできた大切な風習だ。元宵節の前夜にそれぞれの家では、「雁」や「布袋」の形をしたものや、ランタン形のものをいくつか作る。これは、大豆の粉とサツマイモの粉を練って作り、生地は発酵させない。それに蒸してから形が崩れないように硬く練りこむ。大豆の粉は硬く、サツマイモの粉は柔らかいので、一緒に混ぜるとランタンの本体が安定して立ち、油も漏れ出さない。ランタン菓子の形はシンプルで、素朴だ。上部は小さな碗状の油入れ、下の部分は丸くした台座、真ん中にくびれを作って、見ためをよくし、手で持ちやすいようにする。石で作ったニンニクを擂る小さな臼のような形だ。元宵節の夜、このランタン菓子にゴマ油を注ぎ、真綿でくるんだマッチ棒の灯芯を真ん中に差すと、明かりを灯すことができる。

小連がランタン菓子を作るのは正月十三日で、早くから起きる。夜があけているのかどうか自分の目では見えないが、窓台にうずくまっているオンドリの鳴き声から時間を判断する。オンドリが三回鳴いて、窓台から跳び降りると、小連も起きた。起きてからまず中庭にニワトリのえさをやりに行く。トウモロコシのひき割りを地面にまくと、オンドリやメンドリたちが足元に寄ってきて一緒になって啄ばんでいる。家にはオンドリ一羽とメンドリ三羽がいる。ニワトリの足音と啄ばむ音によって頭の中で数を数え、家のニワトリは一羽も欠けていないことを確認する。それから小連は中庭を掃除し、水を汲みに行く。桐の木のあたりまで掃いていくと、箒で木の根元をたたいた。そこには数日まえに降った雪が積もっていた。雪はまだ溶けていないということが感覚でわかった。雪の表面は凍結して、その上には小さな斑点ができているのが想像できた。正月に鳴らした爆竹の屑が雪の上に落ち、赤い紙の破片が雪に溶けて赤く滲みだし、まるで水の中に散った牡丹の花びらのようだ。家の井戸は中庭の一角の入り口に近いところにあった。小連はバケツを水口に置いて、手押しポンプの柄を上下させると、水が勢いよくバケツに入る。外気はひんやりとし、手押しポンプの鉄の柄は握りづらかった。汲み上げたばかりの水は思いのほか温かく、小連は温かな感触を頬に感じた。水がちょうどバケツいっぱいになったところで、小連はもうポンプの柄を押さなかった。おそらく目のいい人でも彼女のようにうまく水が汲めるとは限らない。小連は何をするにも手探りせず、手際よくできた。外を

sample

通る人がたまたま小連を見かけても彼女が失明しているとは全くわからないし、てきぱき仕事ができて目に異常などない女の子だと思わせた。

台所の中の仕事は、茶碗なら茶碗、柄杓（ひしゃく）なら柄杓というふうに小連は間違えることがなかった。母親が年中出稼ぎに行き、小連が二度と学校へ行って勉強できなくなってから、小連は家事を引き受け、洗濯に料理に裁縫と何でもこなした。父親が畑の仕事を終えて帰ってくると、いつも小連は食事を作った。家には三畝（ムー）〈二十アール〉ほどの畑があり、ほかに一畝（ムー）〈七アールほど〉借りて耕している。畑の仕事だけでも父親としては十分すぎるほど忙しい。小連は父親に家事をやらないでとは言ったことがなかった。

「とうさんに家事をやってもらうと、使ったものがもとの場所に置かれるとは限らないから、もとにあった場所のものが取れなくなる」とだけ言った。

娘に二度もこう言われると、国庄は娘の気持ちをくんで、置いたものには触れなかった。小連が食事を作るとき、国庄はせいぜい娘に替わって火の番をした。小連がランタン菓子を作るときにはかまどに火をくべてやった。

小連はランタン菓子作りの粉を三回捏（こ）ね、そのたびに生地を三回寝かせ、塊りに艶がでてきたところで、ばしっと手で打ちつけたり、ぐっと押さえつけたりして、生地をランタンの形にした。一塊りちぎってゆっくり両手で撚（よ）り、さらにまな板の上で撚る。丸くなるまで撚って、どっしりした円柱体にすると、上に小さな碗の部分を作り、下に台座を作り、真ん中のくびれを作る。ほとんど完成すると、彼女は両手で持ちあげ、目の近くまで持ってきて、念入りに確かめるようにしてから、つぎは上の小さな碗の部分に縁取りの模様をつける細かな作業に移る。一つ作るごとに小連はまな板の隅にしっかり並べる。ランタン菓子はどんどん多くなり、小連はそれを小学生が整列するように二列に並べた。しっかりした隊列にして少しも間違えない。実際の小学生の隊列よりもきちんとしている。

かまど部屋の入り口に座って菓子ができるのを待っている国庄は一言も言わず、菓子を作っている娘を何か考えごとでもあるかのように見ていた。娘がまな板に一つ並べると、彼は頭の中で一つと数える。村の通りで時折小さく爆

sample

竹が鳴った。しばらく止むと、また鳴りはじめる。正月の一日から十五日まで毎日子供たちは爆竹を鳴らす。これを鳴らしているのは、祝日はまだ完全には終わっていなくて、祝日の雰囲気を少しでも引きとどめておきたいからだ。爆竹の音は大きくはなく、一瞬にして消える。しかし、鳴るたびに人々の心にいつも反響が残り、思いを遥か彼方までもっていく。国庄は小連が作ったランタンの使い道を知っているし、小連がどうしてたくさんのランタンを作るのか気がついていた。見ているうちに涙がでてきて、目の前がぼんやりした。

ランタンは元宵の夜に母屋の入り口の両側の台座に一つずつ置かれる。台座に置かれたランタンに火が灯り、ゆらゆら揺れる明かりは祝日の夜景に彩りを添える。しかし、それは主に子供たちのために用意されていた。つまり、主によその家の子供に盗んでもらうためなのだ。どこかの子供が元宵の夜によその家のランタンを盗んで食べると、目の病気にかからず、目が見えなくなることは生涯ないという。だから、その日の夕方になると、それぞれの家の大人たちは、自分の子供がよその家に行ってランタンを盗むように言ってきかせることを忘れない。それと、各家でもよその家の子供が自分の家にランタンを盗みにくるのを歓迎する。盗むということはほかのところでは明らかに聞き捨てならないし、いい行為でもない。しかし、ランタンを盗むとなると、その意味が全く変わってしまう。そこには悪意のかけらもなく、人々の託す願いがあり、ロマンチックな輝きすら放っている。言うまでもなく、小連がランタンをたくさん作るのは自分の経験を踏まえてのことであり、ほかの子供のためを考えてのことだ。彼女は目の病気にかかって自分の目が見えなくなってしまった。ほかの子供が自分の作ったランタン菓子を食べて目の病気にかからないこと、目がはっきり見えることを彼女は願っているのだ。

元宵節が瞬く間にやってきた。昼過ぎから日暮れまでまだ時間があり、小連は身づくろいをはじめた。顔を洗い、頭を洗って窓のそばに立ち、何度も髪を梳(す)いた。彼女の髪は濃くて多く、片手で大摑みにできる。彼女は髪を一本選(え)り分けて二本の指で上から下へ撫でつけた。毛先も細くはなく、枝別れしていない硬く太い髪だ。目が見えなくなって、こんな立派な髪をしていて何の役に立つのか。彼女はまた髪を一本手でつかんでぎゅっと下に引っ張り、髪が自

sample

分の頭にあるのかどうか、一本引っ張れるかどうか試してみた。引っ張ると頭がちくりと痛い。その時心もかすかに痛んだようだ。

彼女は髪がどんなに多くても、一本一本が神経につながっていることがわかって、もう引っ張るのをやめた。窓のそばの小さな机に鏡が置いてあった。小連は鏡の中の自分を見ることができなかったが、いつもするように鏡に向かって髪を梳いた。髪を梳く前にいつもするように鏡の表面をきれいに拭いた。小連はきれい好きだ。家のあちこちを拭いて、毎日家のなかの拭けるところをくまなく拭く。「見ぬもの清し」という。自分がみえなければ、どこでもきれいだし、どこでもなんとか我慢できるということだ。小連はそうは思わなかった。自分が見えないということは、ほかの人が見えないことと同じではない。自分が見えなければ見えないほど、自分と周りをきれいにしておかなければならない。小連は決して自分をごまかさなかった。

次第に外が暗くなってきた。曇り空で、空気が湿っている。また雪が降りそうだ。実はもう雪は降り始めていた。しばらくしてちらほら舞い始めたが、人々は雪が降っていることに気づいていなかった。このような暗い夜はランタンをつけ、ランタン菓子に火を灯すのが一番だ。闇が深まれば深まるほどランタンとランタン菓子の明かりが映える。小連の印象では、元宵節の夜には大きな月はめったに出ないし、月の光が大地を照らすときはほとんどないように思った。おそらくお月さまは人の気持ちがわかり、人々がランタン飾りを十分愛でられるように、正月十五日になるとこっそり姿を隠すのかもしれない。あるいはおそらく空にお月さまは出ているが、地上のランタンが多いと、月の明かりが見えなくなるのかもしれない。人々はひたすらランタンを見るのに夢中になって、月を見ることにそれほど注意を向けないのだ。

小連は蒸したランタン菓子を取り出して、母屋の真ん中にあるテーブルに置いた。全部で十二個だ。ほかの人はふつう三、四個しか作らないのに、彼女は一度に十二個作った。彼女はろうそくを立てる部分の一つ一つに事前に準備しておいた灯芯を差し込む。父親の国庄が二つのランタンに油を注ぎ、火を灯すのを手伝ってやる。それから小連が

sample

ランタンを一つ一つ持って行って、母屋の入り口の両側の台座の上に置く。ランタンの口の部分は黄金のように、金色の光りを放っている。二人は部屋にもどり、期待をこめてよその家の子供たちがランタンを盗みにくるのを待った。

小連はきれいに梳いた長い髪を後ろでくくり、母親が町で買ってきた花柄のピンを留めた。それに母親が買ってくれたダウンジャケットを特別に着た。ダウンジャケットはほどよい大きさで、腰の部分に紐がついていて、体にぴったりあわせられるし、暖かい。母親は彼女にダウンジャケットは赤い色だと言った。彼女はこれを着れば、全身真っ赤な姿になると想像することができた。春節に母親は帰ってきたが、「破五」が過ぎるとすぐに出て行ってしまった。母親は仕事が忙しいからと言った。母親はそう言うとすぐに出て行ったが、父親は止められなかった。小連は母親と父親の関係がよくないということがわかっている。母親は父親が真面目すぎるし、何の能力もないのを嫌っていて、いつも父親に出稼ぎに行って金を稼いで来いと言って家から追い出そうとする。父親が金を稼ぎに行かないので、母親は父親とベッドを共にしようとはしない。どうしようもなくなって、父親はやむなく出稼ぎに行った。だが、父親は金を稼がないうちに、あやうく命を落としそうになり、腹に傷跡を作ることになった。腹を手術しなければならなくなったのだ。父親は家に帰ったその日に母親に会うなり自分の服をたくし上げた。母親は誤解した。父親はズボンの腰に差し挟んでいる、出稼ぎで稼いできた金を取り出して見せるものだと思っていた。ところが、服をたくしあげて顔を出したのは、腹に残った手術の跡だった。この傷は母親の同情を勝ち取るどころか、さらに母親の父親に対する一貫した見方を立証することになってしまった。何ら能力もないし、まったく間抜け同然だというわけだ。母親は父親に腹を立て、自分で出稼ぎに行ってしまった。母親が出稼ぎに行ったあとのはじめての春節には、小連の目はまだ悪くはなかった。母親が今回春節に帰ってきたときに小連は母親の姿が見えなくなっていた。母親が娘の目の前で手を振っても娘の目は何の反応も示さない。それがわかると、母親はすぐに娘の頭を抱きかかえた。母親はしきりに嘆いた。

「もともと小連が中学校を卒業したら、つれて行くつもりだったのに、こんな酷いことになってしまうなんて」と

sample

言った。

小連は母親に頭を抱かれたときに、ひとしきり泣くつもりだったが、母親の体にまとわりついた息の詰まる匂いのために泣く気が失せた。体の匂いはどんな匂いかはっきり言えなかったが、いずれにしろ慣れない匂いだった。匂いは母親を包んでいるようでもあり、彼女と母親を隔てるようでもあり、親しみがもてなかった。母親の体だけでなく、町から持ってきた母親の化粧入れはもっと強い匂いだった。その入れ物の匂いは揮発性のものらしく、母親がどこに置いても小連にはどこにあるかわかった。ある日、彼女は母親の化粧入れを手で触った。

「ほしかったら、置いていくよ」

彼女はすこし怖い感じがした。

「いらない」

母親が出稼ぎに出て行ってから、彼女は部屋に何度か水をまき、何度か掃除した。香りのよくない匂いは次第に薄くなり、やがてなくなった。部屋の中に今こもっているのはランタンの燃える油の匂いとろうそくの燃える匂いだ。二本の赤いろうそくは父親が春節用に買ってきたものだ。各家のろうそくは春節のときに全部使いきらないで、元宵節に半分残しておく。ろうそくが燃えると周囲は揺らぎ、壁の年画やテーブルのうえの供え物、椅子に座る父と娘の影もわずかに揺れる。小連は立ち上がり、入り口に置いたランタンはまだあるかどうか、よその子供に盗まれていったかどうか確かめに行った。彼女は右と左を触って確かめたが、ランタンはまだそこにあり、置いたままだった。彼女は部屋にもどり、続けて待った。しばらくして、また確かめに行った。ランタンはまだ盗まれていなかった。小連はとても辛抱強い。夜はかくも長い。小連の辛抱強さは夜よりも長いのだ。彼女はランタンがよその人に持っていかれるまで待った。

村の通りからにぎやかな声が聞こえてきた。子供たちが村の中央の原っぱでランタン比べをしているのだ。どの子供も自分のランタンが一番明るいし、一番きれいだと思っている。子供たちは大きな声で叫んだ。

sample

「おれのほうが明るいぞ、おれのほうがきれいだ」

ある男の子は勇んで牛のふぐりランタンを提げ、女の子の方形のランタンにぶつけ、どちらのランタンが丈夫なのかを比べようとした。女の子は男の子のランタンにぶつけられないようにすぐに逃げ出す。すると、男の子は追いかける。それを遠くから眺めると、ランタンが自分で足をはやして、暗い夜の中をゆらゆらと浮遊して鮮やかな弧線を描いているように見える。男の子が女の子に追いつくと、本気で女の子のランタンを壊そうとするのではなく、ただ軽くぶつけただけで、勝利の声をあげる。

「やったぞ、やったぞ」

中にはまだ歩けない子供がいて、父親か母親が子供を抱いて他の子供とランタンを比べる。

親たちは子供の手を握ってランタンを上下に揺らして大声をあげた。

「ほら、ランタンだよ、ランタン比べだよ」

子供は楽しくなって大人の懐でゆらゆら揺られ、きゃっきゃと声をあげる。昔、小連もランタン比べの中の一人で、こうした光景が自分の周りにあった。いまの小連は二度とランタン比べはできなくなった。目が悪くなってから小連は家の戸口からさえも出ていくことはなくなり、活動範囲は自分の家の中だけになってしまった。村の人たちはもう自分のことを忘れてしまったのではないだろうかと小連は思った。

小連は三度目のランタンの確認に行ったが、明かりのついたランタンはまだ盗まれていなかった。彼女は父親に油を継ぎ足してと頼んだ。小連も一度ならず何度もよその家のランタンを盗んだことがあるが、目の病気を防ぐことはできなかった。これはどうしてだろう。小連は思い返してみた。ランタン菓子を持ち帰ったのは間違いない。けれど、それを口には入れず、毎回食べなかった。ランタン菓子は硬くて一口噛(か)んでも歯がたたず、おいしくない。ランタン菓子をおもちゃにしているうちに、どこかになくしてしまった。もし、その時菓子を食べていたら、おそらく自分の目は大丈夫だったかもしれない。彼女は今夜自分の家にランタン菓子を盗みにくる子供たちが菓子を食べてくれ

sample

るように願った。
開けっ放しにした入り口の前に足音がした。おそらくランタン比べをした子供たちが解散したのだろう。子供たちはおそらくもうすぐランタンを盗みにくる。国庄と小連は一瞬興奮し、身を隠して、ランタンを盗みやすくしてやろうとしたが、足音はすぐに遠ざかり、中庭に入ってランタンを盗もうとする者はいなかった。小連は表情を曇らせて、うなだれた。まさか、自分は失明しているので、自分の作ったランタンは縁起でもない、ご利益がないとでも思われているのだろうか。小連は思わず涙を流しそうになった。
父親の国庄は座っていられなくなった。
「よその家のランタンを見にいってくる、まだあったら、一つ盗んできてやる」と言った。小連の返事を待たず、彼は出かけ、入り口に向かった。
入り口のところで、国庄は綿入れの布靴を脱ぎ、そっと母屋の入り口にもどり、ランタンを二つ盗んだ。灯りを消して、中庭のほし草の山に置いた。それから靴を履きなおし、しばらくそこを動かず、外から帰ったばかりのふりをして、足元を強く踏んだ。
「小連、小連、うちのランタンはなくなっているよ。誰かが盗んでいったんじゃないのか」国庄の声は少し弾んでいた。
小連は出ていって両側の台座を手で触ってみると、ランタンは父親の言ったとおりになくなっていた。小連の気持ちは父親よりももっと弾んでいたようだ。彼女は手をこすりあわせた。
「本当だね、本当になくなっている」
「ランタンを盗みに来る子供たちは、数人ずつ一組みになってきているから、急いで、残りのランタンに油を注いで明かりをつけなくっちゃ」
親子はうれしそうに慌しく十個のランタンに明かりをつけた。ランタンの明かりがテーブルに並んだ。小連がラン

sample

タンを二つ、入り口の台座に置くと、国庄は言った。

「盗みにくる人はおそらく見られるのを心配している。おれが出て行けば、みんなこっちに来ると思う。出て行ってどこかに隠れていよう」

今度は本当に村の通りを回った。もしよその子供に会ったら、うちの家にランタンを盗みにくるように働きかけようと思った。通りにはすでに人の気配はなく、誰にも会わなかった。しかたなく、国庄は家に帰って自分で自分の家のランタンを盗もうとした。国庄は靴を脱ぎ、それに両手を入れ、はって母屋の入り口に近づくことにした。こうすれば、小連が音を耳にしたら、一人じゃなくて、せめて二人の足音だと思うだろう。国庄は絶えずやり方をかえながら、小連が作ったランタン菓子を全部盗み、ほし草の山に持って行った。すべて終えると、国庄は芝居の一くさりを歌いながら、家に帰ることにし、村の通りで歌い始め、歌い続けて家に入った。このときには雪は大降りになり、大地にあまねく月光が射したように地面にうっすらと積もっていた。彼が部屋に入ると、二本のろうそくのうちの一本が消え、一本に明かりがついていた。小連もそこに座っていなかった。彼は小連に、もう寝ているかと訊いた。小連はもう寝ていると言った。家のランタンは全部盗まれたか、と重ねて訊いた。小連は今度は返事をしなかった。彼は雪が大降りになったと言ったが、今度も返事はなかった。小連は一日中忙しくしていたから、きっと疲れたのだろう。寝かしておこう。

ランタン菓子は食べ物で作られている。国庄には捨てるのが耐えられなかった。彼はランタン菓子をビニール袋に入れて、ほし草の山の中に押し込んでおき、そのつど取り出してはかじった。もちろん、いつも小連に見つからないように外で食べた。ランタン菓子を食べてあと七つになり、もう一つ食べようとしたとき、全てなくなっていた。ほし草の山をくまなく探したが、みつからなかった。その日の昼食時に国庄が鍋の蓋をあけてみると、残りのランタン菓子がすのこの上に蒸しなおされていた。国庄は驚きを隠しきれず、ランタンがどうしてここにあるのだと言った。

「とうさん、ランタン菓子は温めなければ食べられないよ。冷たいのを食べたらお腹を壊しちゃう。ランタン菓子

sample

を蒸しなおしたから、一緒に食べようね」

〈了〉

コレクション中国同時代小説5　神木
劉慶邦　著／立松昇一・渡辺新一　訳
定価三、七八〇円（本体三、六〇〇円）
ISBN978-4-585-29515-0　C0397
四六判・上製・四四〇頁
二〇一二年四月刊行予定
勉誠出版　株式会社　刊

sample